

日立、家庭用エアコン「白くまくん」ボッシュに生産売却

「環境エネルギーネットワーク 21」主任研究員 石橋直彦

日立製作所（以下、日立と呼ぶ。）は2024年7月23日、米ジョンソン・コントロールズ・インターナショナル（JCI）との空調合弁会社の株式の4割の持ち分を独ボッシュに売却すると発表した。6割を保有するJCIもボッシュに全株を売却する。

日本国内の業務用空調事業は日立の家電子会社である日立グローバルライフソリューションズ（GLS）に移管する。日立は事業再編で2026年3月期に1250億円の売却益を計上する。ボッシュが今後100%株式を取得する合弁会社、ジョンソンコントロールズ日立空調（JCH）は日本で「白くまくん」のブランドで家庭用エアコンを展開している。ボッシュ側は各国の競争法当局の審査を経て2025年4～6月期をメドに買収手続きの完了を目指す。

空調設備は新興国で需要が拡大しているほか、建設ラッシュが続くデータセンターなど業務用途も増えている。業務用空調についてはエレベーター事業を手掛ける日立ビルシステムなどとの相乗効果が見込めるとして継続保有を決めた。

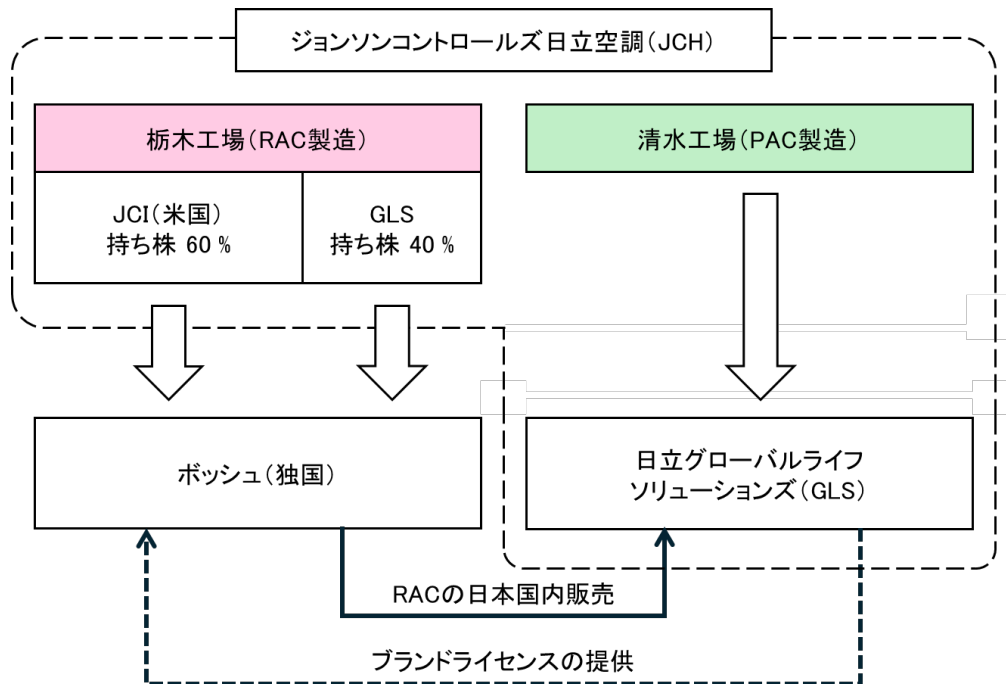
合弁会社は日本国内に栃木県栃木市と静岡市に生産拠点を持つ。家庭用エアコンを手掛ける栃木市の工場はボッシュ傘下に移り、業務用エアコンの静岡市の工場は日立グローバルライフソリューションズ（GLS）傘下となる。家庭用エアコンの日本国内の販売事業もGLSが引き継ぐ。

日立とJCIは双方の空調事業を切り出す形で2015年に合弁会社を立ち上げた。日立は2009年3月期に巨額赤字を計上したのを契機にIT（情報技術）を中心とした事業入れ替えを進め、ITとエネルギー、インフラを中心とした事業構造となった。その一方で、資本効率を高めるために非中核事業の資産売却は続ける方針を示している。既に連結対象から外れたJCIとの空調合弁会社の持ち分を売却することで、人工知能（AI）など成長領域に経営資源を振り向ける。

ボッシュは、日立ブランドだけでなく、JCIが展開してきたYork、Coleman、Champion、Luxaire、Guardian、Evcon、TempMasteなどのブランドで製品をグローバルに提供していくことになる。ボッシュの空調事業は今回の買収によって、売上高が約50億ユーロ（約8480億円）から約90億ユーロ（約1兆5260億円）に拡大する見込みである。なお、ボッシュの空調事業は欧州を中心に展開していたため、今回の買収でJCIの北米市場、JCHの日本を含めたアジア市場が補完される形となる。

これらの冷熱ソリューションは、生成AI（人工知能）需要で拡大するデータセンターや、電力消費の抑制が可能なグリーンビルディングといった成長分野への展開が可能だ。日立は、冷熱ソリューションの事業展開を、ボッシュとのグローバルでの協創を含めて加速させたい考えである。日立 執行役副社長 コネクティブインダストリーズ事業統括本部長の阿部淳氏は「あらゆる産業分野でHeating&Coolingに対する需要が高まっており、空調事業は日立グループにとって戦略的に重要な位置付けにある。今後はボッシュが有する豊富なフットプリントを生かして、日立ブラ

ンドの高効率／低環境負荷の空調機器とデジタル技術を組み合わせた Lumada ソリューションをグローバルに展開していく」と述べている。



再編成後の組織（予想）

日本の空調技術は世界最高水準のものであり、その用途は居住環境の改善や産業用途、食品の流通など多岐にわたっていて、省エネルギー性の高い製品を生み出すことにより地球温暖化防止にも貢献しているといっても過言ではないと考えます。近年、三洋電機がパナソニックに買収され、東芝が米国キャリアの傘下になり、また、本稿に示したとおり日立の空調事業の一部が独ポツシュに買収されることとなりますが、世界の空調事業の再編の流れの中にあっても日本の空調事業がその高い技術力を発揮して更なる発展をしていくことを願っています。